

Title	金朝の實録
Author(s)	藤枝, 晃
Citation	東洋史研究 (1948), 10(2): 80-92
Issue Date	1948-05-25
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138878
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

金朝の實錄

藤 枝 晃

まへがき

る。その迹が『金史』の中に大體認めることができるやうに思はれるのである。

『金史』はきはめて短日月の間に作り上げたものであるから、あり合はせの材料をほとんどそのままとつて出来たと考へてよいものであり、その材料のもつそれぞれのスタイルがそのまま『金史』にあらはれてゐる。そのもつとも主要な材料は歴朝の『實錄』であつたわけであるが、同じ史館で作る『實錄』でありながら、一つ一つの『實錄』がそれぞれの來歴をもち、それぞれの特質とかくせとかいつた様なものをもつてゐる。

金朝では次に表に示した様に十部の『實錄』が作られた。大體からいふと、世宗以後と海陵以前とでスタイルが非常にちがつてゐることは容易に認め得るのであるが、細かくみると、いま言つた様に、一つ一つについてそのことは指摘できる。この程『金史』を一讀する機會があつたので、以下、いささか知り得た所を書きつけておきたい。

(名 稱)

(卷 數)

(監 修 者)

(完 成)

(『金史』の参照箇所)

一、祖 宗 實 錄	三卷	完 顏 越 勛	皇統元年	本紀、66勛傳
(先朝實錄、始祖以下十帝實錄)				
二、太 祖 實 錄	二十卷	宗 弼	皇統八年	本紀、66勛傳

三、太宗實錄	紀石烈良弼	大定七年	本紀、72 穀英傳、92 曹望之傳		
四、熙宗實錄	(張景仁、劉仲淵、曹望之同修)				
五、海陵實錄	張景仁				
六、(睿宗實錄)	十卷	紀石烈良弼	大定十一年	本紀、72 穀英傳、98 匡傳	
七、世宗實錄		夾谷清臣	明昌四年	本紀、	
八、(顯宗實錄)	十八卷	完顏匡	承安三年(?)	完顏匡傳	
九、章宗實錄	百卷事目二十卷	張高行	簡勵	興定四年	本紀、106 張行簡傳
(衛紹實錄)					106 賈益謙傳
十、宣宗實錄		王若虛	正大五年	126 王若虛傳	

* 卷數は『三史質疑』による。この兩者は帝位についてゐない。
 ** 同 趙秉文『進章宗實錄表』(『澠水集』卷十)による。

(一)『祖宗實錄』と(二)『太祖實錄』

國家草創の際は一とくに金朝の様な異民族出身の王朝にあつては——もちろん史官などもなかつたし、重要な記録を保存するといふ様なことさへも行なはれなかつた模様である。宋國との往復文書を集録した『大金弔伐錄』をみると、太宗の天輔六年以前の記録はなく、それ以前の宋國との交渉の経過のあらましを

數行で以て述べてゐるにすぎないことから、その記録の保存の狀況が判る。記録こそなかつたけれども、王室をはじめ、女真人の名家には、それぞれ祖先の功業を語る言ひ傳へがあり、また、本朝でいへば稗田の阿禮のやうな、とくにさういふ故實に通じた黃久約(『金史』卷六六に本傳あり)阿離合懣(『金史』卷七七に本傳あり)の如き人物もあつた。

太宗の天會六年(一一二九年)から完顏昺らによつて

編修のはじめられた『祖宗實錄』『先朝實錄』とも『始祖以下十帝實錄』とも書かれてあり、正式の呼び名を知らぬ」と『太祖實錄』とは、さういふ言ひ傳へを記録したものである。また勅はほかに『女直郡望姓氏譜』などを作つたといふ(『金史本傳』)。

『金史』を特色づける『世紀』はすなはちその『祖宗實錄』にもとづいて出来たもので、『太祖本紀』はいふまでもなく『太祖實錄』がその源流であり、また國初の名臣の傳は、兩『實錄』のほかその様な家傳・家譜の類に依つたものと思はれる。その文體は、後世のとのつた實錄の様な、年を逐ひ日にかけた記録の體とは趣を異にし、そこには親から子に、子から孫にと語り傳へ言ひ繼がれた物語りの中に、草深いアシホの生活の匂ひを強く漂はせてゐる。

(三) 『太宗實錄』と(四) 『熙宗實錄』

『太宗實錄』は大定七年に紇石烈良弼以下の史臣によつて作り上げられたことが、その編修官の一人なる曹望之の傳(『金史』九二)に見えるが、『熙宗實錄』に

つては、いつ、そして誰が作つたのか、『金史』その他に見えない。しかし、『太宗實錄』が大定時代になつてやつと作られたのなら、『熙宗實錄』もそれに先立つて作られたことはまづなかつたであらう。金朝では、太宗あたりから諸般の制度が次第に漢風にととのつてゆき、熙宗から海陵時代にかけて急速にそれが進んだのであるから、記録の類も、この頃は追々にととのつて來たであらうと思はれるのに、『實錄』の編纂がおくられたのは、熙宗から海陵、世宗への皇位の繼承の上に紛争があつたのに關係した事情によるのであらう。

そのことよりも、この兩朝の『實錄』に關するものと大切な問題は、元朝にこの兩『實錄』が傳へられて、いまの『金史』を作るときに利用せられたか否か、といふことである。

元の至正三年に『遼金宋史』の編纂がはじめられることになり、歐陽玄がその總裁官として都に上るとき、もとの史館の同僚(にして恐らくは文宗のときの編纂計畫の當事者であつた)蘇天爵がかれに書いて送つた『三史質疑』(『滋溪文稿』二五)の中に、

「金が亡びたとき、張柔が金の實錄を接收したのを、中統の初めに史館に送つて來たが、そのとき、すでに太宗・熙宗兩朝の『實錄』は中に含まれてゐなかつた。これは金朝の南遷の際にはおき忘れられずに汴京まで運ばれてゐたらしいが、どうして張柔の手にこれだけが渡らなかつたのであらうか」

と疑がつてゐる。話はすこし岐路にはいるが、蘇天爵は、汴京にこの二部の實錄があつたことを證するため、『義宗の東遷の際に元好問が『九朝實錄』の寫しを作らうと言つてゐるが、これは太祖から宣宗までの七朝に睿宗・顯宗の二朝を加へたものであらうか』といふ。元好問が『九朝實錄』といつてゐるのは、かれが史院の編修官となつた哀宗の正大元年（一二二四年）のはなしであつて、『元文類』五一所收『故金漆水郡侯耶律公墓誌銘』、はじめに私が數へた十部の『實錄』のうち、『宣宗實錄』（正大五年成る）はまだできてゐないときであり、蘇天爵にはこの點に少し誤解がある。それはそれとして、蘇天爵が關係してゐたときに闕けてゐた兩朝の『實錄』は歐陽玄のときに補充し得た

かどうか。もし補充できなかったとしたら、これなしで編纂が出來たであらうか。

『三史質疑』には、「金でも『國史』を作つたことがあつて、いま史館には太祖・太宗・熙宗・海陵の『本紀』だけがある。」といふ。『國史』とは、その王朝が亡びない前に、『實錄』などを整理して作つた紀傳體の歴史で、唐でも宋でも、しばしば『國史』を作つたから、金でもそのまねをしてこんなことをしたらしい。これがあれば、兩朝の『本紀』は問題なく作れるわけである。また章宗朝に太祖・太宗・宗熙・世宗四朝の『聖訓』を編輯したといふから（『本紀』承安四年）これにもなにかの役に立つたであらう。だが、『列傳』や『志』はどうしたか。

『三史質疑』には、さらに「金では三品以上の者のために『實錄』の中に傳を立てるが（このことは『玉堂嘉話』卷八所載の王翳の手記にも見える）、それは簡単な官歴をしるしただけのものであり、『明實錄』や『清實錄』を知るわれわれには、それがどんなものであるか一應の見當はつく）、四品以上の者で重要な功績

のある者や太宗・熙宗や衛紹王など、『實錄』のない時代に死んだものはそれさへないのだから、手のつけやうがない」といふ。

『列傳』を一通りみたところでは、太宗熙宗時代に死んだ者はたしかに少い。女真人が數人あるが、これらは家傳か何かあつたと思はれるから——また、さういふ文體であるが——これを別にして、漢人では、そのいづれもが父または子の傳と併せて立てられてあるから、さういふ關係で傳にのつた者であり、獨立で傳を立てられたもので、この期間に死んだことを明記せられてゐる者は一人もない。明記せられてはゐなくても、あるひはその頃に死んだかと思はれる者は一二あるが（たとへば卷八十七の時立愛）、一人二人は墓誌銘か何かの資料が偶然あつて傳が作られた、といふやうなことも、當然あつて然るべきことである。

次に『志』では、『禮志』・『輿服志』・『曆志』などは基づくべき書物があつて、それを寫したことがわかつてゐるものであるが、『五行志』・『食貨志』・『選舉志』などは、『實錄』からの抜き書きで出來てゐるやうに見

うけられる。その後者の類の諸『志』では、この兩朝に關する記事が極めて少くて簡單なことが、大定以後の驚くばかりに細かな記事に接續してゐるためにかへつて目立つてゐる有様である。つまり充實した『實錄』がそのものになつてゐるのではなくて、何かほかの種類の材料——恐らくは『國史本紀』に依つたものである。

『表』についても同様で、『交聘表』のこの部分は、宋に關する條がやや精しいだけで、西夏と高麗とに關しては、元旦や誕生日の祝賀の使節の規則的な交換以外にしるされることはすくない。『國史本紀』だけを材料としてこれだけのものは結構つくれさうである。といふより、編纂のときにせいぜい『國史本紀』くらいしか材料とすべきものがなかつたらしい、といふ言ひ方の方があたつてゐる様な書きぶりである。

結論として、太宗・熙宗の兩朝の『實錄』は、至正時代の編纂のときにも補はれることはなく、『國史本紀』その他のもので間に合はせた、と斷じて間違ひなさうである。

(五) 『海陵實錄』

『海陵實錄』は次の世宗によつてつくられた。この世宗は非常手段によつて海陵に代つて帝位についたのであるから、両者は政敵であり、しかもその争ひは骨肉の間の問題から出てゐて、極めて深刻なものであつた。大定年間に作られたこの『實錄』は、世宗に對する諛諂の結果として、海陵とその黨派とに對するはげしい惡意に満ちたものであつたことが『金史』のその『本紀』や『后妃傳』・『佞幸傳』の關係の諸傳の筆つきから察することが出来る。衛紹王の『實錄』を作る計畫があつたとき、その相談をうけた賈益謙が海陵と世宗との間柄をたとへにひいて、

「海陵が弑せられて世宗皇帝が立ち、大定の三十年間は近臣で海陵の惡い所を摘發した者はよい役にありつき、史官が『實錄』を編纂するにあつては、その亂行や陰險さをあしざまに述べ、惡名を千載にのこした。だが今からこれをみれば、百に一つも信することができない。」

と述べたことを元好問が傳へてゐる（『元遺山集』卷三 四所收『東平賈氏千秋錄後記』及び『中州集』九賈益謙小傳。『金史本傳』はこの傳によつたものである）。その具體的な例が、やはり元好問の筆になる『故金尙書右丞耶律公（履）神道碑』（『元文類』卷五十七所收）の中に語られてある。

御史大夫の張景仁が領國史となり、耶律履が編修官で『海陵實錄』をつくつた。その後、世宗が侍臣に問ふには、「海陵が熙宗を弑したとき、血が顔にはねかへり、袖にまでついた、といふが、景仁はどうしてこの事を書かないのか。」と。「景仁はもととと海陵に仕へて、信任のあつた人物でございますから、それで遠慮して書かなかつたのでございます。」と答へたものがあつた。世宗は色をなして、「景仁にそんな氣持があるとは思はなかつた！」といふので、履がすすみ出て、「私はもともとと景仁とは仲がよくないのでございますけれども、景仁がそんな心持でゐるとは思ひません」と辯護した。世宗はこの調子で『海陵實錄』の書き方に文句をつ

けたらしく、『金史本紀』の大定十九年あたりに「前代の史」事を論じた話が二三ヶ所見える。恐らくその頃にこの『實錄』はできたものであらう。さうだとしたら、その年に耶律履が修撰官に昇進したのも、そのわけが判る。張景仁が御史大夫で修國史を兼ねるのは大定二十一年であるが、かれはさうなつて間もなく死んだのであり（『本傳』）、且つその時にできたとする『本紀』と合はなくなつて来る。『神道碑』の文に見える「御史大夫」とは、張景仁の敬稱としてその最終の官を肩書につけたもので、「その張景仁が監修國史となつてゐたときに」と、よむべきものであらう。

(六) 『睿宗實錄』と(八) 『顯宗實錄』

睿宗と顯宗とは、どちらも在世中は帝位につかず、死後にそれぞれの子から帝號をおくられ、従つてその子のときに作られた傳記が、『實錄』と呼ばれてゐたので、他の歷朝の『實錄』とは性質を異にする。太祖以前の祖先については『金史』は『世紀』なる獨特のものを作つたことはさきに言つたが、この二帝のために

は『本紀』の末に『世紀補』を作り、『本紀』とも、また普通の『列傳』とも區別してゐる。かういふ試みは他の正史には全くみられない。

『金史ハ完顏匡傳』に、承安三年（一二九八年）もしくはそれより後に『世宗實錄』を進すすめた、とあるが、『世宗實錄』は明昌四年八月にすでに出來てゐるのであるから（『本紀』）これは『金史詳校』にゆふごとく『顯宗實錄』を作つたといふことでなければならぬ。

(七) 『世宗實錄』

世宗は近世の名君の一人に數へられ、小堯舜の稱があり、金の一代でもつとも目立つた君主である。『貞觀政要』をよんで唐の太宗に感服して、唐の太宗、といふよりは『貞觀政要』を以て理想の政治として、さかんに美言佳句を吐いて名君ぶりを發揮した。しかし、美言佳句も吐くばかりでは第二の唐の太宗になれないから、それを一々速記させねばならない。すると、人拂ひをせねばならないやうな相談ごとは、大切なことでありながら記録できない。それが氣に入らないとい

ふわけで、さういふ時は相談に與かつた大臣は、あとで史官にその話を記録させるやうにいひつけたけれども、『本紀』大定十二年十一月戊子、もともと人拂ひせねばならないやうな事を、一々大臣が記録させるはずもない。そこで、それから數年すると、さういふ場合でも史官だけは席をはづさずにゐて記録することになった。そのことは、恐らく『實錄』からそつくりとつたと思はれる文が『本紀』（大定十八年正月）と時の左丞石据の『傳』とに見える。

修起居注の移刺傑が書をたてまつて申すには、
「朝奏に人を屏けて事を議するに、史官もまた與り聞かざれば、記録するに由しなし」と、上はみかどこの處置について左丞石据と右丞の唐括安禮とに御下間に相成つた。二人のこたへに、「むかしは史官が天子の左右に侍り、その言動をば必らず記録いたしました、これは人君のいましめとし、はばかりる所がある様にとのためでございます。周の成王が桐の葉をきつて圭をつくり、戯れに叔虞を諸侯に封するまねを致しましたところ史の佚は『天子は戯れごとを申さ

るべきではござりませぬ。申されたことばは必ず史が記録し奉ります」と申しました。されば、人君の言動といふものは史官が一々記録したもので、記録から避けることが出来なんだと相ひ見えする。」と申し上げた。みかど上の申さるるに、「朕が『貞觀政要』をみたところでは、唐の太宗が臣下と議論して、はじめは云々、それからどうなつて、最後はかくかく、といふ書きぶりぢやが、これは紛れもなく史臣が傍らに居つて記録してゐたのぢや。若し機密が洩れるのが心配なら、とくに慎しみぶかい者をえらんでこの役に任ずればよい」との仰せであつた。朝奏に人を屏けて事をはかる場合にも、記注官が避けないのはこれからはじまつたことである。

この様に、何も彼も記録させるとなると、その記録が氣になつて来るのは、また當然のこと、世宗はこれを覗かうとしたか、書き方に注文をつけたか、何かしららしい。徒單克寧に「むかしから人君は自身の記録は御覽にならぬことになつて居ります」といましめられて、「何も自分の記録がみたいのではない。史の

ことが判らないからたづねてゐるのぢや」と苦しい言ひわけをせねばならなかつた（九二『徒單克寧傳』）。

かうした記録をもとにしてできた『世宗實錄』は世宗自身の言動に關する記載がばかに詳しく、またそれに應じて一般政務に關しても前代に比べて格段に詳細になつたものであることが、『金史』の『世宗紀』や大定時代の諸大臣の『列傳』、または『志』の類から察することが出来る。世宗といふ人物はたしかに凡君ではなかつたと思ふが、その三十年の治世は決して太平の時代ばかりがつづいたのでなく、即位のそもそもからが、非常手段によるものであり、その初期には前代からひきつづいた契丹人の大亂があり、『東洋學報』二六ノ三、四）中期にも後期にも漢人の民族主義的な政治運動がしばしば起り（『東洋史研究』八ノ六）、趙翼は「大定時代は亂民多し」とさへ斷定する有様である。だから、『世宗紀』にあらはれた所では、天下の亂れの中にあつて小堯舜は宮廷に大臣たちを相手に名君ぶりを發揮する、といふすがたになつてゐる。

『世宗實錄』の完成の時期について、『金史本紀』に

は、明昌四年（一一九三年）八月辛亥に國史院がこれを進きんつたと記録するが、趙秉文の筆になる党懷英の『神道碑』（『滄水集』卷十一）には明昌六年に『世宗實錄』の編纂に参加したことをいふ。後者は、あるひは『顯宗實錄』の誤りであらう。

（九）『章宗實錄』

世宗について立つたその孫の章宗の時代になると、いかなる場合にも諫官と記注官とは席をはづさぬといふ前代の慣例には時によつて改廢があつたらしく、すなはち、即位して間もなく、記注官らは席をはづさぬ様にきまつたことが『完顔守貞傳』（七二）に見え、また明昌四年になると御史の奏上には退席することになつたといふ（『本紀』）。だがだいたいにおいて前代と同様にあるひはそれ以上に詳細な記録が作られてゐたらしく、章宗に關係した記事は、『金史』の紀・傳・志・表を通じて、世宗時代以上にほしい。

趙秉文の『滄水集』十卷に『進呈章宗皇帝實錄表』があるが、章宗一代の功業を述べたみことな文であ

る。これによると、この『實錄』は本文一〇〇卷に對して『事目』二十卷がつけられてあつたといふ。卷數の割合とその名から考へて『事目』といふのは相當こまかな内容目録であつたらうと思はれる。われわれが今みる明や清の『實錄』にはこの様なものはない。かういふことがいつからはじまつたことか知らないが、この傳統は元朝にもうけつがれて、各『實錄』には卷數からいつて本文の二割前後の『事目』がつくられてゐた（『元文類』卷十六）。

（衛紹王の『實錄』）

衛紹王はクーデターによつて弑され、それによつて立つた宣宗の朝では天子の扱ひをしなかつたけれども、さきの海陵の例に従つて、『實錄』だけは作らうとしたことが『宣宗紀』興定五年（一二二二年）正月甲午の條に見え、そして、衛紹王時代の御史中丞で、時に鄭州に引退してゐた賈益謙のもとに史館から編修官を一人派遣して當時の模様を聞き取らせた、と『中州集』卷九のその傳（『金史』一六二の傳はこれに基づく）に

見え、また、そのとき編修官におくつた詩もあはせてのせられる。ところが、その編修官といふのが、外ならぬ『中州集』の編者元好問であつたので、賈の詩は元の『鄭州にて致政賈左丞相公にたてまつる』（遺山集）卷八にをさむ」といふ詩にこたへたものであることを、元好問みづから『東平賈氏千秋錄後記』（『遺山集』卷三十四）の中で語つてゐる。

元の詩（自注、時に命を被り公に就いて先朝の逸事を訪ふ）

黃閣より歸り來れば 履易も輕く

天 五福をもつて 康寧にあたふ。①

四朝の人物 耆舊と推し

萬古の清風 典刑にあり。

鄭圃も亦よく道あるを知り ③

漢庭久しく遺經を訪ねんと欲す。④

長く弧の南にそふて極星をうかがふ。⑥

帝城この後 瞻依近く、

① 五福、康寧。『尚書洪範』に見ゆ。

③ 四朝。世宗、章宗、衛王、宣宗をいふ。

③ 列子居鄭圃四十年無識者。

④孝文帝が濟南の伏生について『尚書』を傳へしめた故事。

⑤『史記天官書』南極老人、『正義』老人一星在弧南、爲人主壽命延長之應。

賈の詩

聞くならく 才名 妙年よりありと、
愁なる 政府 もと賢を妨げぬ。

物華天寶 今古なく

鳳閣〔中書〕鸞臺〔門下〕 いづれか後先ならむ。

鄭圃 道尊きを 何ぞ敢て望まん、

濟南に書あり 子まさに傳ふべし。

言ふなかれ 老ひの眼に昏花みち

見るに及べば 風鵬九天に上れりと。

だがこの『實錄』は結局完成しなかつたらしい。王鶚の手記(『玉堂嘉話』八)蘇天爵の『三史質疑』、ともに衛紹王には『實錄』がなかつたことをいふ。『千頃堂書目』、倪燦の『補遼金元藝文志』などに『衛王事迹』興定五年進なるものをのせるが、これは編纂の命が下つたといふ右の『本紀』の記事を完成したと誤解

したものである。

これが完成しなかつたことは、編纂の任にあたつた(あるひはその内の一人であつた)元好問が間もなく史館を出たことが、唯一ではなくともその重要な理由の一つではなかつたかと思はれる。氣をまはせば、この厄介な『實錄』編纂の不愉快な役から元好問の方が逃げ出したのかも知れないといふことも想像できる。

(十)『宣宗實錄』

最後に、『宣宗實錄』は、金の國祚も危殆に瀕してゐた正大五年(一二二八年)に成つたもので、『本紀』、その監修者は王若虛であつたといふ。

元好問の『王内翰墓誌銘』(『遺山集』卷十九)ならびにそれによつた『金史』一二六の本傳には「正大初め章宗・宣宗實錄成る」とある。もし『本紀』の記事が正しければ五年を「正大初」とはいひ難く、「章宗實錄」は「金史詳校」に指摘する如く、すでに大定中に成つてゐたものであるから、遺山のこの記事は間違つてゐる様であるが、この前後におなじく史館に職を

奉じてゐた遺山がかういふ間違ひを書いたことは一寸不可解である。

劉祁の『歸潜志』卷八に、この『實錄』が作られるときの次の様な逸話を傳へてゐる。

正大年間に王若虚が史館を主宰してゐたとき、雷淵が應奉兼編修官となつてゐて、ともに『宣宗實錄』の編輯にあたつた。二人は文體の傾向が同じでないのでよくごたごたが起つた。つまり、王若虚の方はサラサラした筆致が好きで、客觀的に述べる。雷淵は新奇なところを狙つて新語を造つて使ふ。そこで王がいふには「『實錄』はただ當時の事情を文にするだけのものだ。大切なことは眞實を失はない、といふことだ。こんな風にして歴史を作れば事實と異つてくる。」と。雷はまた雷で、「およそ文章を作るのにレトリックを無視したら、マンネリズムに陥つて、つまらないものになつてしまふ。」といふ。だから、雷の作つた文は多くは王が手を入れて書きかへてしまふので、雷は憤慨に耐えず、人に向つて「われわれ兩人の作つたものを天下の文人に見せ

て、その是非を定めてもらひたい。」といつた。さうなると王の方もをさまらず、「雷君は文章を作るときに、よく變てこな字を使ひたがるが、これがどうして新奇だなんて言へるかね。」と言つてゐたことがあつた。雷の方でも、またいふには、「王先生の議論は大變高尚で、文章もなかなか難かしい。ちやうど經義科の試験や科擧の試験の規則で縛られた様な文章だ」と。

む す び

以上、金朝の『實錄』の一つ一つについて知り得た所を述べた。

元遺山のしるす所によると、金朝では歴代の『實錄』を祕閣に藏し、副本一部を史館においたといふ（『元文類』五一『耶律貞墓誌銘』）。宋人の手になる『三朝北盟會編』に二ヶ所ばかり『太祖實錄』を引く。これなどは極めて例外で、諜報機關のととのつた宋側に何かのことからその部分だけが傳はつたと考へるべきで、その寫しが無暗に流布してゐたものではないであらう。金

朝の汴京遷都とともに、もちろん『實錄』も運ばれた。

汴京陥落のとき、蒙古軍の大將の一人である張柔は史館にあつた方の『實錄』を手に入れたといふ（『元朝名臣事略』引『行狀』）。そして、この『實錄』をめぐつて元好問の『金史』編纂の畫策が行はれ、結局これが王鶚により元の史館にをさめられ、これを材料にしていまの『金史』が作られたのであるが、いま一部の『實

錄』の消息は元朝時代にすでになんら傳はる所がない。なほ、汴京の陥落にさきだつて、元好問は小字で、その寫しを作つて馬に積んで天子の蒙塵に従はせようと企てたが、實施する餘裕がなかつた、といふ（『南冠錄引』）。それらの経緯はまた別にこれを述べることにしたい。

（二二、八、一二）